2014 7/8
No.1974
毎月第2・第4火曜日発行

政経かながわ

一般社団法人
—神奈川政経懇話会—

県内のみこしが一堂に集まる「みこしコラボレーションinイセザキ」が６月29日、横浜市中区のイセザキモールで行われ、江戸前神輿（みこし）、どっこい神輿合わせて17基が参加、３千人を超える担ぎ手が伊勢佐木町７丁目から１丁目まで練り歩いた。

神奈川新聞社

政経かながわ

2014 7/8 No.1974

contents

視点・点描 3
勝ち負け以外のものさし

講演録 4
「急展開する日朝、日韓関係の行方」
コリア・レポート編集長　　辺　真一

社　会 8
縮小社会への備えを急げ
首長は哲学を持ち地域経営を

社会保障 10
介護改革、労働者は置き去りに
電話相談に相次ぐ悲痛な声

企業最前線 12
「都市鉱山」ビジネスに脚光
小型家電リサイクルが後押し

くらし2014 14
将来の基礎年金は3割削減

広告珍談 16
～いまこそ広告すべき②
世情もわかる……

NNAアジア経済リポート 17

会員のページ 18
会員の動き

会員のページ 19
設立50周年は2年後に

事務局だより

◇横浜定例講演会
2014年7月14日（月）
13時30分～15時
横浜ベイシェラントホテル＆タワーズ　5階「日輪」
講師は元内閣法制局長官で弁護士の　阪田　雅裕　氏
演題は「政府の憲法解釈と集団的自衛権（仮題）」

◇横浜定例講演会
2014年8月7日（木）
13時30分～15時
崎陽軒本店　5階「マンダリン」
講師は神奈川県地震災害対策検証委員会座長で元東京経済大学教授の　吉井　博明　氏
演題は「神奈川県の地震危険と備え（仮題）」

視点点描

勝ち負け以外のものさし

4年に1度、世界を熱狂させるサッカーのワールドカップ（W杯）が、母国ブラジルで間もなくクライマックスを迎える。1次リーグではアメリカ大陸勢の躍進と欧州勢の苦戦が目立ったが、決勝はどんな対戦になるだろう。

日本代表は欧州のビッグクラブに所属する本田圭祐、長友佑都、香川真司らを擁し、過去最高の陣容と期待を集めたが、1次リーグ1分け2敗で敗れ去った。

総括の声はいろいろだが「一番重い責任は日本サッカー協会にある」と全国紙で明快に論評した人がいる。神奈川新聞の日曜日付コラム「紙面拝見」の執筆陣の1人、李国秀さん（57）だ。

現在は厚木でフットサル場を経営しているが、桐蔭学園高を全国の強豪に育て上げ、Jリーグのヴェルディ川崎（現東京V）の指揮も執ったサッカー指導者としてご記憶の方も多いだろう。2002年W杯日韓大会代表の森岡隆三、戸田和幸は桐蔭時代の、元日本代表で横浜F・マリノスの中沢佑二はV川崎時代の教え子だ。

李さんは論評の中で、子どもやジュニア世代の指導者に向けて「勝ち負けへの強いこだわりを捨ててほしい」とも呼びかけている。技術を磨き、自分で判断できる選手をじっくりと育てるためだ。

桐蔭時代の李さんは勝ち負けにこだわらない人だった。もう25年近く前の話だが、試合で勝った李監督の元へ取材に伺い、「おめでとうございます」と切り出すと、「こんなにミスの多い試合で勝ってもおめでたくない」と切り返されたことを覚えている。

当時の高校サッカーは前線へロングボールを放り込み、こぼれ球の行方が勝敗を分けるような戦いがまだ多かった。そんな時代に、パスをつないで主導権を握るスタイルを高校生に体現させた。今でいう「ポゼッションサッカー」であり、全国に衝撃を与えた。

結果も出ていたが、勝つことより、次のステージに通用する選手を出すことを大切にしていた。その指導からW杯選手が育った。

勝ち負けは評価のものさしとして分かりやすい。だが、それだけ見ていては本質には迫れない。それは他のスポーツでも同じだ。指導者の育て方とともに、マスコミを含めた周囲の「見る目」も変えていかなければならない。

次回の李さんの「紙面拝見」はW杯終了後になる。どんな内容になるか楽しみだ。

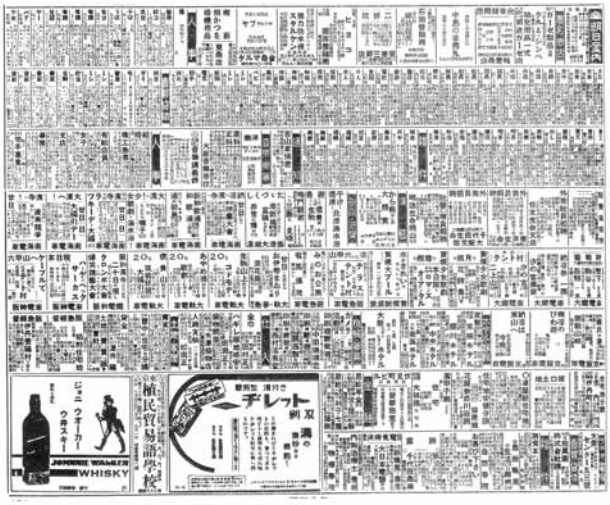
（神奈川新聞社運動部長　岡部　伸康）

世情もわかる……

案内広告のほとんどは、1行18文字の活字で3行。「3行広告」とも呼ばれた。

案内広告は1898年（明治31）年1月11日、報知新聞に初めて掲載（前号参考）され、つぎつぎと各新聞にひろまり、特集欄をもうけ、タイトルもつけられた。

報知の《職業案内》につづいて8月、読売が《なかだち》。1900（明治33）年3月、時事新報が《よろずあんない》。翌年4月、東京日日新聞が《日々便覧》。7月、東京朝日新聞が《朝日案内》。ほかにも中外商業新報は《中外案内》、万朝報は《希望広告》、中央新聞は《中央案内》、やまと新聞は《やまと手引》、二六新聞は《一字千金》、国民新聞は《国民案内》など。そのページは各紙とも好評で、長年つづいた。図が1例、33（昭和8）年8月の大阪朝日。1ページ13段のうち、《朝日案内》は8段もしめている。右上から白抜きの「著名商店」は3行より多いが、つぎの「人事」「売買・貸借」「雑件」はいずれも、3行広告である。そこから行数が増え、旅行・ホテル旅館・仕入れから金融まで。海水浴や宝塚など庶民のレクリエーションから、不動産の価格、求人先まで読み取れて、当時の社会背景が感じられ、案内広告は読者の閲読率も高かった。



掲載料はいかほどか、《朝日案内》の左に「三行一回四円、五行一回六円五十銭、十行一回十三円、掲載日指定および匿名は三行・五行五十銭、十行一円増。掲載料前金、郵券代用可能」とある。巡査や小学校教諭の初任給は、45円ほど。白米は10キロ、1円90銭。週刊紙が13銭であった。それにしても広告主が、匿名とはどういうことだろう。

1934（昭和9）年6月、読売新聞はこんな社告をだした。

「最近毎日、約二頁ないし時には数頁にわたる、案内広告を掲載しておりますが、これは東京諸新聞中、第一の多数掲載量を示しております。現に五月中の読売案内広告掲載総計（日本電報通信社調査課発表）によれば、2万549件、10万5216行で、件数において2万、行数において10万を突破したものはまさに読売新聞だけであります。これは《読売案内》が最大の利用者をもち、最大の効果をあげていることを如実に物語るとともに、また東京市内版発行部数のもっとも多いことを証明しているのであります」。

その頃、ニューヨークの株価大暴落にはじまった世界大恐慌が吹き荒れ、日本は国際連盟を脱退するなど不安定な世情であった。

（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）

（図）《朝日案内》＝1933（昭和8）年8月20日・大阪朝日新聞掲載